

○景観を探る 3 : 「東京湾の景観を探る」

講師：白井 豊（千葉県立中央博物館）

2011年5月28日（土）於：千葉県立中央博物館 講堂 時間：13:00～14:00

千葉県の東京湾岸、浦安市の西部から富津岬までの約75kmにわたる海岸部は、埋め立て以前には広大な干潟が続き、海苔と貝の養殖地となっていた。

写真家の林辰雄氏は、昭和30年代からの埋め立てを早くから察知し、干潟とそこに暮らす人々の日常的な生業の姿が眼前から消えていくことを念頭に、多くの写真を撮影した。今日では貴重な記録となったこの写真に、干潟での人々の暮らしぶりを読みって紹介しつつ、水鳥の生活環境と関連づけて考えてみたい。

かつての湾岸は潮の干満によって、干潟とそこに続く浅い海、ウタリ、ミオなどの区分があった。そこで本講座では第一に、それぞれの場所で行われていた人の営みをみたい。干潟では、女性たちが簡単な道具を使って貝を掘っていた。一方干潟に続く海では、男性が巻き籠など大きな道具を使って貝を採っていた。また、千葉市の幕張・検見川・黒砂一带にはウタリと呼ばれる場所があった。ウタリは干潟のなかの窪地で、干潮時でも水が残った。春先には、南風で多くのカワナ（和名アナアオサ）が溜まったが、これを食品や飼料・肥料とするために採取した。ウタリでは、えび搔き漁も行われた。ミオは、沖に至る水路である。

それぞれの場所は水鳥にとっても、餌をとる場として重要であった。そこで第二に、干潟とそこに続く浅い海、ウタリ、ミオなどの区分をシギ・チドリ類やアジサシ類などの採食物や彩食方法の違いと関連づけて考えてみたい。特に嘴や脚の形態に注目する糸口となることを期したい。

2回にわたる「東京湾の景観をさぐる」の講座であるが、2011年3月20日は、千葉市の幕張・検見川・黒砂など南部、5月28日は、浦安など北部に重点をおいて解説したい。なお、水鳥の写真は高島斎二氏が撮影し、今回の春の展示「千葉県野鳥図鑑—水鳥編—」紹介のウェブページに掲載されている写真を用いる。